慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	古ハワイにおける漁業
Sub Title	Fishing in old Hawaii
Author	野村, 兼太郎
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1958
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.51, No.12 (1958. 12) ,p.1021(1)- 1033(13)
JaLC DOI	10.14991/001.19581201-0001
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19581201-0001

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

書評及び紹介

K・E・ボールディング『経済政策の原理』……加藤　寛（八一）
L・W・アイルズ著
本城俊明訳『団体保険の研究』……庭田範秋（八五）

古ハワイにおける漁業

野村兼太郎

一

ある人間の群が火山島に漂流又は到著して、そこに定住すると決心した時、主たる食料を海産物に求めることは、恐らく最も自然であったろう。縄文式土器の使用者が貝塚を形成したことも、活火山が至るところにあり、海岸線近くまで山岳がはびこっている日本のような場合、最も手近な、かつ容易に採取し得る海辺に食料を求めた結果であろう。従って漁撈ということは、こうした火山島に定住した民族にとって、恐らく最初の生活のための営みであったと思われる。その場合、その後農耕が発達したとしても、その制度、慣習に、その以前の漁撈的特徴が全然なかったとは考えられない。日本の場合は所謂大陸島であり、絶えず大陸からの影響をうけていたらしく、農耕の発達も多分に外部からの刺戟に基づくものであったから、純粋に両者の関係をみることが出来ない。

これに反してハワイの場合は、所謂大洋島であり、海上に孤立していたから、漁撈と農耕との関係を知る上には都合がよい。ただ古代ハワイ人はハワイ諸島へ渡来する以前に、農耕的知識をもっていたようである（拙稿「ポリネシア人のハワイ移住について」三田学会雑誌第五十巻十・十一合併号参照）。しかし仮令農耕に関する知識があり、又種子等を持参していたとしても、ハワイ諸島の如き大洋島においては、直ちに労多き農耕に従事することは不可能であったろう。周知の如く、ハワイ諸島は直接海底から迸出した二つの火山系からなる。従って多くの海岸は絶壁をなし、舟著場さえ稀である。傾斜地に耕地を見出すことも容易でなかったろうと思われる。勿論間もなく人口が増加し、労力も増せば、直ちに農耕に従事し始めたろうが、移住当初においては、漁撈に依る収穫と豊富な果実類に依って食生活を営んだものであろう。

第十一世紀に始めて移住して来たポリネシア人は元来海上生活に馴れていたから、漁撈に関しても相当の知識があったものと考えられる。その点においては、原始民の最初の形態を考察するのには不

適当の例であるかも知れない。しかし当初においてはかなり原始的な方法を採用したものと推定されるし、その後、この島の自然的条件に応じて変化したことは、他の文化的方面の変化からも推測される（拙稿「古ハワイにおける社会階級の発展」社会経済史学第二十三巻第五・六号参照）。即ち一七七八年、ジェムズ・クック（James Cook）に依って発見されるまでの七百年ばかりの間に、かなりの変化があったものと思う。

しかしわれわれの手にし得るものは、その以後に編纂されたものばかりである。周知の如く、欧米人に接触する以前には、僅かにいくつかの絵文字の如きもの以外に、ハワイ人は文字をもっていなかったのである。口碑伝承などはかなり古い形のままに伝えられているとはいえ、なお多少の変化を免れないものであり、加うるに外国語に翻訳されたような場合には、一層真意を伝え難いものである。又普通古代ハワイ人の漁法といっても、第十八世紀にハワイ人が始めて外部に知られた時のものを、すべて併記したものであり、七百年の間の変遷を辿ることは頗る困難である。考古学的考証にしても、未だ時代的変遷を示し得るほどには進んでいないようである。移住当初の漁撈がどんなものであったかは、全く推測するより外ないのである。

二

ハワイの伝説に依ると、ハワイの漁業の神はクウラとその子のアイアイとである。この伝説には内容の多少違ったものが幾種か存在する。このことについては他の論文で述べたから、ここでは敢て繰り返さない。要するにクウラとアイアイとが特に漁撈に優秀な技術をもち、各地に漁場を作り、神として崇敬される物語である。クウラが神又は神の化身であるアリイ（貴族）であったか、もしくは漁撈技術に優れたマカアイナナ（平民）であったか、とに論なく、漁撈が住民にとって重要な食料資源であり、その豊漁と否とは直接彼らの生活に関係するので、その守護神としてクウラとアイアイとを崇敬したものであろう。

漁夫が猟に出る際に、これらの神々に祈りを上げる。そうした祈禱の一つに次ぎのような一節がある。

「東より西に至る諸霊に、
内陸の諸霊、浜辺の諸霊に、
クウラに、アイアイに、
植物の食料を生み給うヒナの神に、
わが捧げものを食し、
漁夫のために幸風を吹かせ給え。
彼にあまたの獲物あらしめ、
家途に無事に帰させ給え。
地上のわれらに命を給え。
われらの願は聴き容れらる。」

ハワイ人が霊魂（スピリット）の普遍的存在を信ずる点は日本人によく似ているが、恐らく古ハワイ人が出漁に際しては、まず最初にこれらの祈りを神々に捧げ、何らかの犠を呈したのかも知れない。時には一定の魚の名を挙げ、その魚の魚獲を祈ることもあった。漁を終えて、無事に帰って来た時には、捕れた魚のうちの最良のものを神に捧げたのであった。

漁夫が魚鉤を備える時には、村中の者すべて静粛にしていなければならない。又漁猟に出かける際には音を立ててはならない。漁夫も談話は厳禁である。ハワイ人は魚が音を聞きわけ得ると信じていた。さらに櫓取りは漁場に行く途中においては話をしてはならない。元来漁業に関する禁忌（Tabu 又は Kapu）は、後にも述べるように、いろいろあったが、上述のカプーに依って示さるるように、漁猟そのものが彼らにとって極めて神聖なものであり、いかに真剣なものであったかを示している。このことはまた漁猟に依る収獲が彼らの主要な食料であったことを証するものである。従って優秀な漁夫の社会的地位は決して低くなかったのである。

初期の漁法がどんなものであったか明かでないが、アイアイの伝説に、彼が海中に長い大きな石を立て、そこに魚や蟹が沢山に集まることを予言したり、さらに各地に漁場（ko'a ia）を設置する話が伝っている。そして網や鉤を使用せずに、餌を入れた籠を深い海底に沈めて、魚類をとることが伝えられている。その集まって来る魚は kala, palani, nanue, puhi, ula などの名が挙げられている。puhi は鰻、ula は蝦、kala は surgeon-fish であるという。その捕れる魚の種類に依って、魚獲法もおのずから異なったであろうから、この籠漁法が最も古い方法であったとはいえないが、この方法は、例えばマーシャル群島の土人などもやっていて（Spencer Tinker, "Some Marshall Islands Fish Traps," 1950）、相当一般的に行なわれていたのではなかろうか。大体ハワイ土人の間には大きな魚よりも、蝦とか小魚類を嗜好したようである。

アイアイの伝承のうちには網のことも伝えられている。彼が父クウラから伝えられたあらゆる種類の網の製法を、まだ彼が少年であった時に、その友達及び友達の父に教えたということが伝えられている。勿論これはハワイでは漁猟に関するすべてのことが、クウラ又はアイアイの発明発見に帰せられているから、特定の人間が創ったというのではなく、網の製法は移住以前から知っていたに違いない。あるいは網の一部は前住地から携えて来たかも知れない。しかしこれが補充のためには、やはりこの地の産物から糸を作らなければならない。ハワイにおける網の材料となったものは olona, ulei である。いずれも繊維質の灌木であるが、これから糸をとり、網を作る技術の発達するまでには、多少の時間を必要としたのではなかろうか。又ハワイの漁夫の間には漁夫自身が自分の網や糸を決して作らなかった。大体その家族の女が糸を作り、網作りが網を作った。どうしてこういう分業を生じたかはわからないが、一応網の作製が後に発達したとみてよいかも知れない。序でにその網の使用についての慣行を述べて置こう。漁夫が新網を使用する際には、彼の

漁猟の神々に祈りを捧げる。又古い網を魚と交易して、その古網を最初に使用する際にも同様に神々に祈りを捧げることになっていた。

さらに伝承中にあらわれた漁法をみると、鉤に関する話が多く残っている。それらのうちの一つに次ぎのような話がある。

カエハ(Ka'ay'ha)の父がまさに死なんとする際に、彼に遺言した。「おれはもう死ぬ。おれの骨を海中に投げろ。神々はお前によい贈物をするだろう」と。

カエハは父の遺言に従った。次ぎの日彼はその贈物を探した。彼の父の骨はなくなっていたが、その代りに二枚介(a bivalve)を発見した。カエハは一枚から一つの鉤を作って、残りの一枚を海に返した。その後その貝から沢山の貝を生じ、後世多くの真珠の鉤が作られるようになった。

しかしカエハはたった一本の鉤だけよりもっていなかった。それは魔法の鉤であった。それで彼は多くの鰹(aku)を釣った。彼はハワイ島コナにおける最上の鰹釣師となり、その名声は全島に響き渡った。

ところがその後、彼はその鉤をなくしてしまった。大きな鰹がそれを呑み込み、糸が切れてしまったのである。その鰹は泳ぎ去り、鉤は失われたのである。

カエハは大変悲しんだ。彼は自分の魔法の鉤を探しに出かけた。彼は漁夫の誰かがその鰹を捕えてくれることを望んだ。又漁夫の誰かがその鉤を見つけてくれればよいと思った。カエハはハワイ島の全海岸を探し廻り、終に他の島々へも出かけた。

四 (一〇二四)

とうとう彼は風上のオアフ島にやって来た。ところがある家の上に「白帽あじさし」が飛んでいるのを見つけた。この鳥は鰹の鳥と呼ばれている。鰹の群が泳いでいる上を旋回し、時々掬いとる鳥である。今その鳥がこの家の上を飛び廻っているのである。

「わたしの鉤はあそこにある」とこの若者は思った。

その家はある酋長の家であった。「その鉤が魔法の鉤だということを知っているだろうか。その鉤を使ったろうか。もし知っていたら、恐らく返してくれないだろう」と思った。

「アロハ(注一)」彼はいった。「わたしはカエハです。ハワイ島のコナから来ました。この島の見物に参りました。」

「アロハ」酋長は答えた。「よくいらっしった。わしのところにお泊りなさい。」

カエハは滞在した。しかし彼の魔法の鉤については何もいわなかった。ただ酋長が鰹釣りに誘ってくれたならと思った。それが彼の望みであった。そうすれば彼の鉤がどこにしまってあるかがわかる。取り戻すことが出来るかも知れない。

しかしカエハが予期しなかったようなことが起った。彼は酋長の娘と恋仲になった。彼らは結婚した。彼は魔法の鉤のことを殆んど忘れてしまっていた。

ところが、ある日、酋長がいうのには、「明日、おれ達は鰹猟に出かける。おれの息子のカネイキも出かける。あんたは優れた漁夫だと聞いている。出かけるかね。」

カエハの心は躍った。これこそ機会(チャンス)だ。「ハイ、参ります」と彼はいった。

「あんたを漁師頭にしよう。」彼の義父はいった。「あす朝、星の上る頃までに、用意して置きなさい。」

しかしカエハは何も準備しなかった。「おれは確実に魔法の鉤を手に入れなければならない」と思った。彼は眠っているようなふりをして、静かに横になっていた。

彼は義兄弟のカネイキが彼を呼んでいるのを聞いた。カエハはカネイキが白い真珠の鉤――それは魔法の鉤ではない――をもっていることを知ったので、だまって横になったままでいた。

カネイキはカエハが何も準備していないので怒って、「蟹の爪」と嘲った。

「橈はがた〳〵音を立てている、
漁夫のあか汲みも始まっている、
オー蟹の爪よ、
蟹の爪は眠っている、
鰹つりに出かけず、
妻や妻の両親を扶持せず、
ただひたすらに眠ってる。」

カエハは蟹の爪と呼ばれるのは不愉快だったが、怒ってそれには答えず、叫んだ。

「白貝はカネイキの鉤よ、
古ハワイにおける漁業
生なきもの、用に立たぬ生なきものよ、
多彩の鉤はいずこにかある、
それこそ用うべきもの、
ここに持ち来たれ、
さらば潮はわれらを運ばん、
価値なき鉤を汝の父に返せ、カネイキ」

カネイキは秘かに思った。「ガエハは利巧な奴だ。寝屋に眠っていて、おれの手中の鉤を見ることが出来ないのに、それが白い鉤だと知っている。それは役に立たないという。他の鉤をもって来なければなるまい。」

彼は再び寝屋に帰って来た。「出て来い、お前によい鉤をもって来てやったぞ」といった。

しかしカエハはそれが魔法の鉤でないことを知っていた。「そいつは役に立たない。多彩の鉤でなければ、今日は鰹釣りは出来ないよ」と彼はいった。

カネイキはいろいろな鉤をもって来た。とうとう彼の父の鉤壺をからにしてしまった。カエハはどれもすべて役に立たないと宣言した。

ふとカネイキが他の一つの鉤を憶い出した。それは大きな鰹の胃袋中に発見したものであった。それを家の屋根にさし込んで置いたのであった。それは無用の鉤だと思っていたのである。彼はそれをもって来た。

彼が又もカエハの寝屋に来た時、カエハは戸口に出て来た。「そ

の鉤」だと彼はいった。それを手にとって、目に涙をうかべて、ぢっと魔法の鉤を見た。それから小さい瓠の中に入れ、紐で自分の首につるした。

「サァ行こう」と彼はいった。「二重カヌー(注二)で行こう。よい漕手でなければ駄目だ。水をかぶったカヌーに耐えられるような者共でなければ駄目だ。今日はおれが漁夫頭だ。」

間もなく二重カヌーの用意が出来た。彼らは海上に乗り出し、いつもの鰹の漁場に到著した。「ここが漁場だ」とカネイキがいった。

「もっと沖へ出ろ」とカエハは答えた。

「しかしここが鰹釣りの場所だぜ」とカネイキは繰り返した。「見ろ、鰹鳥が飛んでいるぢゃないか。ここで鰹をとっているのだ。止めて釣ろうぢゃないか。」

「今日はおれが漁夫頭だ。もっと漕ぎ出ろ」とカエハはいった。

彼らはさらに沖へ漕ぎ出した。もうオアフ島も見えなくなってしまうほど遠く出てしまった。「ここが漁場だ」とカエハはいった。外の者は見廻したが、そこには鰹鳥も飛んでいなかったし、鰹も見えなかった。

「聴け。カヌーを廻して、浜の方に漕げ。全力をあげて漕げ。後を見るな。おれが海へ飛びこめといったら、直ぐ飛びこめ。今日はおれが頭だ。そむいてはならぬ。」

人々はカエハを見た。彼の強い腕節を見た。彼を怒らしてはならぬと思った。彼らはカヌーを廻して、全力をあげて漕いだ。

六　（一〇二六）

彼らはカエハが魔法の鉤を取り出したのを知らなかった。しかし彼らはカヌーの後から、突っこんでくるような鰹の走音を聞いた。何だか鰹の中をたたくように感じた。「飛びこめ」とカエハが叫んだ。カヌーの中にはそれが沈まんばかりに鰹で一杯だった。

しかし男達は巧者であったから、彼らは水中に飛び出したが、カヌーのあかを汲み出した。間もなく彼らは皆カヌーに帰った。しかし魚はいなかった。鰹は皆泳ぎ去ってしまったのである。

彼らは又浜の方へ漕ぎ進んだ。とうとうオアフ島がはっきり見えるところまで漕いで来た。その時カエハは又前と同じ命令を下した。再び彼は魔法の鉤をとり出し、再びカヌーの中に鰹がはねていた。再び水につかり出した。もう一度男達がこれを救った。そして又浜に向って漕ぎ出した。

彼らは磯についた。彼らは一匹も魚をもっていなかった。「サァここで釣ろう」とカエハがいった。

「そんなことが出来るものか」と、カネイキが答えた。「小魚が岩間に泳いでいるだけだ。鰹はこんなところに見えっこない。鰹釣りなんて無駄なことだ。」

「今日はおれが頭だ。」カエハがいった。「前方に向け。漕げ。おれが叫んだら、海へ飛びこめ。」男達は命令に従った。しかし今度は鰹は出てこないぞと思った。

再び魔法の鉤を取り出した。又も鰹が躍り上って、カヌーの中にはね上った。「飛びこめ」とカエハは叫んだ。よき頃合を見計って魔法の鉤をしまった。二重カヌーの中には鰹が一杯になって、辛うじて浮んでいるほどであった。

人々が岩間をつたって渡って来た。彼らはカヌーを岸に引上げた。夥しい鰹の荷であった。酋長もその部下もただ目を見はるばかりであった。

「魚をすべての者にわけてやってくれ」と、カエハはカネイキにいった。「これがおれの最後の命令だ。酋長は祝宴をやりなさい。下々の者にも御馳走してやって下さい。そうすれば私の父の霊が酋長に幸運を齎らすでしょう。」

カエハはたった二匹の鰹をとっただけであった。第二のものは彼の妻のために。第一のものはヘイアウ(注三)のために。即ち彼の父の霊へ感謝の捧物であった。

（注一）alohaは愛情をあらわす言葉であるが、いろいろの意味に使用される。ここでは「今日は」という程度の挨拶の言葉である。別れる時にも使う。

（注二）カヌーを二つ結びつけたものである。中央部に渡しを作って、その上に小屋を作ることもある。遠くに物を運ぶ時などに、早くから利用されていたらしい。A. C. Haddon and James Hornell, "Canoes of Oceania," 3vols, 1938 参照。

（注三）heiauは社寺に類するものであるが、その家に属するヘイアウは祖先の霊等を祭る場所、又後になってそれが偶像を作って寺院のような聖地となったのであろう。ハワイ人はいくつも小屋を作る。例えば男の食事をする小屋をmuaといい、女の食事をする小屋をhale ainaという。その家の者が崇める聖所をヘイアウというので、ここは禁忌の場所である。

以上少しく長きに亙って、この最初の真珠の鉤の伝説を紹介したのは、私がこれを読んだ時、日本の火照命の伝説を連想したからである。弓矢と鉤との交換の話はないが、鉤を魚に呑まれ、これを探して歩き、酋長の家に至り、その娘と恋仲となる。鉤はなくなったその鉤でなければいけないこと、又幾度か舟中に水が満ちて、男達が水に飛びこむことなどは、満珠干珠を思わせるものがある。日本の場合の方が、はるかに精練されてはいるが、南方伝承のうちに両者の原型となるものがあったのではなかろうか。注意しているのであるが、未だ管見に入らない。博聞の方の御教示をお願いする。

こういう伝承からも推測し得ることは、ハワイ人は勿論ハワイ渡来以前から釣漁については熟知していたし、又いくつかの鉤を齎らしたことと思う。そしてそうした技術に優れた者を非常に高く評価していたのであろう。なお釣棹を使用したかどうかについては多少の疑問がある。中浜万次郎のことを書いたEmily V. Warinner, "Voyager to Destiny, The amazing adventures of Manjiro, the man who changed world twice." 1956 の中では、日本人が棹の使用を始めてハワイの土人に教えたことになっているが、竹

類も生ずるところであり、全然知らなかったとは思われない。勿論今では竹及びハウ等で作った釣棹が残っているが、それがいつ作製されたのかが明かでない。ただ日本のように多くの種類はなく、簡単なものである。

三

ハワイ人は漁夫として優秀な者であるといわれている。しかしその自然的環境のためか、日本人のように勤勉ではなかったようである。彼らはあらゆる漁法を知っていた。沿岸ではあわび(Pipipi)やその外の貝類 Opihi などを採集したようであるが、日本沿岸のように、貝の種類も数量も多くなかったようである。前述の伝承でもわかるように、真珠貝を尊重したことは認められるが、白玉を装飾品として使用した例もあまり多くないようであり、又日本の場合のように貝塚を形成することはなかった。貝類の収集も海の荒れた後に打ち上げられたものを採ったり、干潮に水面にあらわれたのを岩間などから採集する程度で、深海にもぐって、所謂かずくことはなかった。捕れた貝は塩にして生のまま食したようである。

うにの類 Wana, Ina も夏から秋にかけて、岩間や、珊瑚礁の間から木片でとり、生のまま食していたようである。蟹の種類は多く、Papa'i, 'A'ama, 'Ohiki 等、岩間、砂浜に多く、夜はたいまつをつけて手捕し、昼間は貝肉を餌にして竹などで引出して捕えたらしい。海岸の近くに最も多く、又土人が好んで食料としたものは、小海老 opae であったろう。かの伝説の小人メネフネの好物ともされている。浅い水溜り、海の近くの小流、湿地の草間などに沢山いたらしい。Olona や Ulei の繊維で作った小さな網で掬った。海老網という特殊のものもあったらしい。その外 Ohua, Loli（なまこ）等も好んで食料とされた。これらの沿岸の魚獲物については、一般に誰でも採取し得たのであろう。沖でとれる大海老、蝋蛸の類 U'la, U'la papa'pa などは禁忌があり、ある期間、採ることを禁ぜられた。このことは乱獲を禁ずる賢明な手段であったと論ずる者もある。

投げ網で捕る魚類には Manini, Maiko, Kole, Uhu, Nenui, Uwowo, Moi, Aholehole, Halalu, Auae（ぼらの一種）などと呼ばるるもので、水深三呎から八呎ぐらいのところで捕る。投げ網の外に、Upena Kuu と呼ばれる囲い網も使用する。網目は一吋から二吋半、六呎に八十呎ぐらいの長方形の網である。

前述の如く釣魚は早くから行なわれていたが、その魚は、Oio, Hinalea, Papio, Aholehole, Humhum, Papaa, Maiko, Kole, Kolenukuheo, Ama'ama（ぼら）等で、夜釣には Uu, Upapalu, Mu, Aweoweo, Moi, Aholehole, Alaihi 等である。餌には蟹、小海老、Opeiu（鰯？）等を使用するが、オペルは禁忌（kapu）であったこともあるという。前述のアク（鰹）も時に禁忌であったこともあるらしいが、やがて深海漁業が盛んに行なわれるようになると、アク、オペルと共に、まぐろ(Tuna)、めかじき(A'u)、やりいか（He'e）等を釣る。鉤は前述の真珠の鉤もあったが、鯨骨、豚牙、

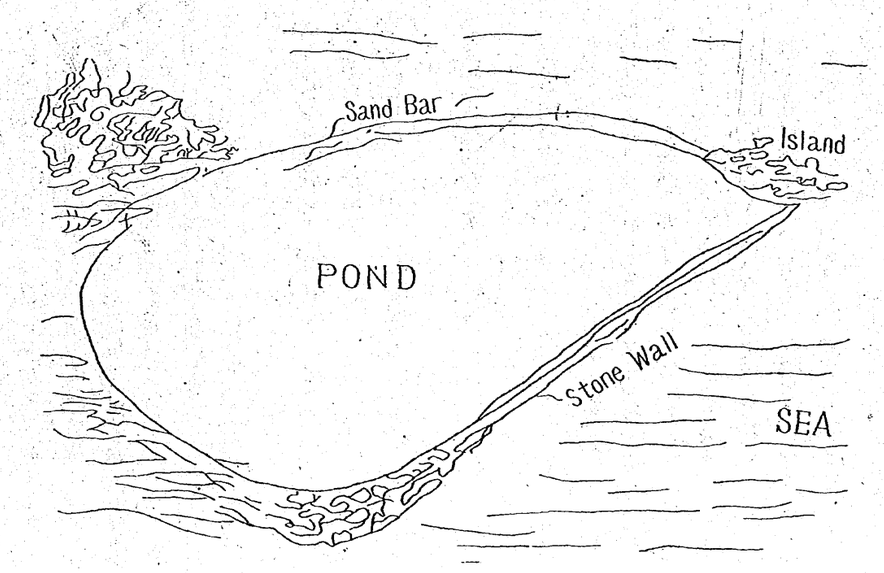
殊に人間の骨から作ったものが最も多いようである。時に Kauila のような堅木からも作った。

突漁も知っていた、というよりも古くは槍で突く方法を多く採用していたのではないかと思う。単に水の表面に出て来るのを突くばかりでなく、もぐって突くこともあった。Uhu, Uiua, Maiko, Kole, Ape, He'e（いか）などがその対象に挙げられている。

たいまつをつけて、夜捕魚をすることもあった。たいまつは Ku-kui の実からとった油に竹を湿して作る。大体池や海浜の浅瀬等で行なった。又石浜などで、石や岩などで囲いを作って魚を捕ることもあった。これを Umu といった。その外前述した籠に餌を入れて罠とする方法や毒をしかけて魚をあがらせることもやったようである。毒は Auhuhu という植物からとったものであるという。但しこの使用は現在は勿論であるが、昔でも制限されていたということである。

以上のように、古ハワイ人は大体あらゆる魚獲法を知っていたといってもよいが、最後に彼らが養魚池をかなり早い時に作っていたことを指摘して置く必要がある。養魚池の遺跡はハワイ島を始め、マウイ島、モロカイ島、オアフ島及びカウアイ島等の大きな島にはすべてある。そのあるものは、かの小人メネフネが作ったといわれているくらいであるから、相当早く作られたものとみるべきであろう。その大きさは大小さまざまであり、一エカアから百エカアまである。多くは海浜の近くで、石又は岩と粘土で堤を作り、一部海水の出入をなし得るようにして置く。見たところはあまり精巧なもの

Pupuhaku Fish Pond（養魚池）



ではないが、海水の横溢することのないように工夫してある。

ここへ捕えて来た幼魚を放って育てたのであるが、彼らが何故にこうしたものを作らざるを得なかったかというところに問題がある。養魚の種類は必らずしも一定していないようであるが、ぼら、Awa, Aholehole 等で、沖猟でとれる魚が多かったという。恐らくこれらの魚は彼らの最も好むところのものであり、不猟の時に備えてこの種の池を作ったのではなかろうか。古ハワイ人は漁夫として非常に用心深い漁夫であった。禁忌の制の如きもその一例としてよかろう。かつ又日本人同様に魚の好きな民族であった。従って漁業は彼らにとって頗る重要な職業とされていた。しかしその豊凶は全く自然に依存しなければならなかった。その結果として早くから養魚の法を思いつかせたのであろう。

四

古ハワイ人にとって、漁業が重要であったことは上述の如くであるが、その漁法はさまざまであり、熟練を要するものであった。又それは彼らにとって一つのスポーツでもあった。前述した鰹釣りの如きもそうであるが、それらは専門の漁夫の仕事であった。浜辺における漁りの如きは一般の者の仕事でもあり、又娯楽でもあった。わが国における潮干狩の如きも、その以前の浜辺漁りの変化した行事ではなかろうか。古ハワイにおいても、女達が浜辺で漁りをしたらしい。それらのうち興味ありと思われるものを以下いくつか述べよう。

一隊の女の群が浜に出て漁りをする。勿論それはその日の食料を獲んがためであって、遊びではない。所に依って違うが、その服装に禁忌がある。あるところでは赤色を禁じ、あるところではあかるい黄色を禁じている。彼らは水にはいる前に、お祈りをする。まず海草の一片をとって、

「オー、クウラ
わたし達を海からの害から守らせ給え、
すべての悪から守らせ給え」

そして海草を海に投げる。さらに他の海草の一片をとって、

「オー、ヒナ
わたし達を陸からの害から守らせ給え、
すべての悪から守らせ給え、」

と祈って、海草を陸の方へ投げる。

かくして獲物を探し始める。ある者は貝類、蟹類を集め、ある者は岩の隙間の小魚を捕える。最初の獲物は必らず神に捧げる。猟が終った時に他の一つを捧げて感謝することになっている。又時には一家が共同してウムを作る。珊瑚礁などの所に石で魚の隠家を作るのである。ウムには魚の出入する穴を二箇所作って置く。ウムが出来上ると、誰もそれに触れずに、しばらく監視している。ただうなぎの入ることを嫌って、うなぎが入ると、毒草をさし込んで追払う。うなぎが入ると魚が入らないからであろう。相当小魚類がはいり込んで来たところで、一方の口に籠を置き、他方の口からハラの葉(Pandanus たこのき)で追い出し籠に入れるのである。ある家族の作ったウムはその家族が魚の必要な時には、いつでも使用出来る。他の家の者はこれを使用することは出来ない。

前に籠漁のことを述べたが、これも単純ではない。いろいろな種類があり、大きさも各様で、捕る魚に依っても違うらしい。例えばPala'ni という魚を捕える時には、最初は罠にかけるのではなく、養魚の目的で籠を作る。風呂桶ぐらいの大きさで、それよりも大きい。いくつかの棒を心として木の支根で編む。馬鈴薯を堅めにうでて、パラニのいそうなところに置く。毎日馬鈴薯を観察して、それにパラニの小さな歯跡を発見した後に、籠を沈める。この籠は魚の出入を自由に出来るようにし、中に馬鈴薯を糸で結いて置く。石を重しにし、相当の深さのところに沈める。数日馬鈴薯を補給して、魚の集り工合をみる。相当集まったところで、しばらく馬鈴薯の補給をやめる。その後その籠の傍らに同じような籠を沈める。これが罠籠である。魚の入口を小さくして、一度入ると容易に出口の見つからないように内部を作り、なかに馬鈴薯をつるして置く。夥しいパラニが捕れる。この籠をカヌーに引上げ、銀鱗の躍るのを見る時は、永い間の漁夫の辛抱は報われてあまりあるものであった。

最後に今一つ Uhu という魚の網猟の話をしよう。このウフという魚を捕るのには、なかなか技巧を必要としたらしい。彼は魚の性質、漁場の状態を十分よく知っていなければならない。漁夫はまず何匹かのウフを池に飼って馴らす。丁度われわれが池の鯉に手をたたくと出て来るように、餌をやって馴らす。ウフには禁忌の時期があるので、それが解かれた時でなければならない。それまでに網を用意する。網は小さな四角形で、二本棒を手としてつける。わが四手網の小さいものと思えばよい。風向も、空も、海も、適当な時に出かける。

彼は例の如く祈りをする。馴れた一匹のウフに紐をつける。静かにカヌーを漕ぎ出す。勿論カヌーの中には網がのせてある。この漕ぐのに大いに熟練を要する。もし彼のウフを傷けでもすれば、その日の猟は不運に極っているからである。やがてかねて調べて置いた漁場に到著する。このウフという魚の性質は、

「ウフ、内気な臆病な魚、
だが得々と泳ぐ魚、
群がると注意深い魚、
触れれば飛びのく魚、
互いに口を突き合う魚、
淡紅色のウフよ。」

漁夫はゆっくりと漕ぐ。海面を注意する。風は静かだが、波がある。漁夫はククイの実を口に入れて嚙み、その油を海面に吐く。油が拡がって、一面に静平な水面を作る。ごくゆっくりと漕ぐ。

突然一匹のウフを見つけると、静かに網を下す。網の中には結いつけられた馴れたウフがいる。漁夫は一方の手で、カヌーを安定させながら、他方の手で網を支えている。ウフは馴れたウフを見つけ

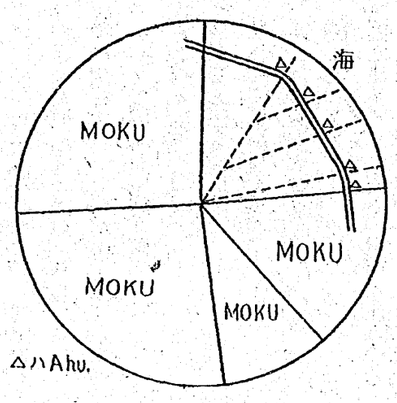
ると、そっと傍らに近より網の上に泳ぎ込む。その瞬間手早く網を引上げるのであるが、大いに熟練を要する。迅速に手ぎわよく引上げないと、馴れたウフを傷けたり、魚が網を越えて逸走してしまう。熟練した漁夫は夕方までに三四十四の大きなウフを捕えることが出来るという。この魚は大変美味なので珍重されたらしいが、わたしがハワイ滞在中には残念ながら口にすることは出来なかった。

以上の例はむしろ個々の猟であるが、一部落が全体としてやることもある。それは魚群が海上にあらわれた時である。その時期になると、丘の上に見張りが立つ。この漁夫をキロという。魚群が来たことがわかると、部落中に知らせの者がかけ廻る。カヌーが何十艘も漕ぎ出される。キロは非常に熟達した漁夫でなければならない。彼は手に竹竿をもち、その一端にカパ（布）の旗がついている。その旗竿で、魚群の進行する方向をカヌーの漁夫達に知らせる。カヌーは魚群を囲むように配置され、網が下される。その網は下部に石で重しをつけ、水面に垂直に下される。上部には木片の浮きがついている。キロが絶えず魚群の動きを指示し、カヌーはそれに従って行動する。

最後にキロが竿をまっすぐにする。魚群が包囲の中央にあることを示すものである。直ちに網は周囲からしぼられてゆき、魚群は包囲網の中に集められ、各カヌーは魚を満載するようになる。それらの魚はすべてその部落のものである。早速魚神クウラに感謝の捧物がなされ、魚はすべての者に分配される。その夜は村をあげての宴会である。

五

以上述べたような古ハワイの漁業に関する伝承等はかなり多く、その外にもなお沢山残っているが、大体以上でその状態を明かにし得たと思うから、次ぎにその漁撈の制度等について述べたい。しかしこれらに関する資料は頗る乏しい。上述の例によってもわかるように、一定の魚場が占拠されると、その占拠した家族又は部落の者の独占するところとなったようである。



ここにアフプアア(Ahupuaa)というハワイの古い土地区劃がある。海岸を底辺として山地の方に三角形、又は矩形を形成している地帯である。図示すると前図の如くになる。点線に依って区分された部分がアフプアアである。一つの島がいくつかのモク(Moku)に分かれている。モクは比較的大きな区分で、大小さまざまあるが、例えばオアフ島でも、マウイ島でも六つにわかれている。それよりも小さい区分で、アフプアアというのがあり、一人のアリイ(貴族)

の勢力圏を示している。

この名称は Ahu 祭所の意味から来たのであるという。アフというのは島を一周する道路の領分の境目のところに建てられた祭所である。ここにはその領内の土地からの貢租が保存される。そしてそこには代表的貢物の豚をククイの木に彫った影像が置かれている。豚は puaa である。両者が一つになってアフ・プアアと呼んだのであるという(C. J. Lyons, "Land Matters in Hawaii" "The Islander", July 2, 1875)。

このアフプアアのあるものが、海に達していない場合に、その地方の住民は浜辺の漁業をすることが出来ない。しかし他のアフプアアを通って、彼ら自身のカヌーを海におろし、深海漁撈をする権利はあった。このことは何を意味するものであろうか。

元来アフプアアにして海に面さない地域はなかったはずである。海浜に住居を作り、最初は恐らく漁猟を以って主要な食料を獲得していたのであろう。やがて平地帯にタロ芋や、蔗糖、バナナ、パンの樹、山芋等を植え、植物性食物を補充し、山地帯の森林からカヌーの材料を伐採していたのであろう。それがその地方のアリイ（酋長）を中心とする縄張りであったのであろう。その縄張りをアフプアアというようになったのは、ずっと後のことであって始めは名称がなかったのであろう。従って最初は図に示したように、海をもたないアフプアアというものはなかったのであろう。

しかしいかに火山島とはいっても、多くは二つの火山が併合して一島を作っているから、かなり複雑な地形になる。人口が増加するにつれて、海をもたないアリイの領地も発生したのであろう。しかし彼らの生活から漁猟をなくして考えることは出来ない。従って海のないところに住みながら、カヌーを作り、漁猟に出ることが認められていたのであろう。そのくらいハワイ人にとって、漁業は重要なものであったのである。恐らくハワイの古い制度は漁業にその基本を置くといってよいのではなかろうか。かの有名なフラ・ダンスの如きも、魚類游泳の形を模したものと考えられないこともない。マカヒキの大祭（前掲拙稿「古ハワイにおける社会階級の発展」参照）の如きも、又その祭に国王が漁猟に出かけるのも、皆漁業中心の遺風とみることが出来る。そして恐らく最もよき海浜、最もよき漁場を多く占拠し得たアリイが、アリイ・ヌイとなり、有力となったのであろう。

【附記】上述の論稿はそこに注記したものの外は、Department of Public Instruction Office of Hawaii District Schools Hilo の報告 "The Early Hawaiians and How they Lived" (1953) と Pukui and Curtis, "The Makahiki; Fishing and Farming." とに、主として材料を得た。これらはいずれもタイプされたもので、公刊されたものではない。ハワイ大学附属図書館にある。その外原地での聞書もあるが、一々註記するのは煩雑であるので省略した。

（昭和三十三年十月十五日稿）